

なんぼうよしみち
南坊義道

1930年11月、山口県山陽町柏原に生れる。早稲田大学
露文科中退。学生運動その他を経て、現在、出版社囑
託。作品に「深くわが汝より」「銀河系一族」「修羅
紀行」「他人の死」など。

現住所、埼玉県和光市下新倉 西大和団地 2-3-403

夜の幽閉者

一九七四年六月十五月初版

著者／南坊義道

発行者／木島力也

発行所／株式会社現代評論社

東京都中央区京橋三十一／郵便番号一〇四
電話（〇三）五六一一八七〇一（代表）／振替（東京）四四一九

印刷所／三協美術印刷・日東印刷

製本所／協和製本

箔丁、乱丁本はおとりかえいたしません

©1974. YOSHIMICHI NANBO

夜の幽閉者

書き下ろし長篇小説

序章

木造の安アパートの部屋の窓から晴れた青い、いさな空のなかに眺められる青桐の葉は、四月の気層の底に妖しげにゆらめきながらさかしまに高坂一郎の頭蓋の底に沈みこんできた。くすんだ色のちいさな坐り机と、食台と、あとは周囲の壁にうずたかく積みあげられた古びた書物の山と、黄色く変色してしまつて、なにか秘密めいた匂いのする資料のようなもの、いっぱい詰まつたちいさな本箱しかない四畳半の薄暗い部屋の底に寝ころんでいる高坂は、めまいがおさまつたあとのうつろな視線をちいさな窓の外の青桐の葉に投げかけたまま、ゆるゆると、十年まえの頭部の古傷に右手をもつていったが、やがて彼は急につらそうに顔をゆがめて両手で頭をつよくかかえこんだ。やはり十年まえに彼とおなじく傷つき、そして最近二度目の手術

のあとの経過もよくて退院していた彼の婚約者が、昨夜から急に容態が悪化し、危篤状態におちいったことが、このとき彼のころにおおきく覆いかぶさり、よわまっている彼の重い頭をいっそう重くした。さきほど彼の婚約者の母親がアパートへ電話をかけてよこし、達子の具合が急に悪くなったので、家出をしてそちらにいつているはずの弟の誠を連れてすぐにきてくれと涙ぐんで告げた。ときどき意識が混濁し、譫言ばかり言っているという。

十年まえ、警棒で右眼を突かれて後方にのけぞったところを、さらに頭部を警棒で打たれた彼の婚約者は、この十年間に二度手術をした。警棒で突かれた右眼は挫滅して、目蓋が裂け、眼球のなかの黄褐色の液汁が黒っぽい血液とともに流出し、傷が癒えたあとに肉が黄色くまるく盛りあがってしまい、彼女の眼は片目のジャックのような目になり、厚い肉の壁を腫れぼったくくつつけたままであった。しかし、潰れた眼はまだしも、つよく打たれた頭部の傷の後遺症を取り除くため、彼女は二度目の手術をしたばかりであった。

高坂はながいあいだ輾転としていた古畳のうえに起きあがり、薄暗い部屋の底にぼんやりと立ちつくした。達子が死ぬ、と彼はうつろな頭をかかえて思った。十年まえ、彼もまた警棒で二度までも打たれた頭部の深奥のあたりから鈍く発してくる重い耳鳴りの音と、吐き気と、さらに一瞬自分を見失ってしまうかのようなぬまいとが、さきほど一つに緋ないまざって発作のよ

うに彼をおそったのであるが、一ト月に数回はおそってくるこの後遺症の発作のため、彼は幾度も就職に失敗し、いま、あるちいさな倉庫会社に夜警として勤めている。彼もまた前後二回入院し、手術をしたが、その甲斐もなく、彼女のあとを追って三度目の手術をうけるため現在働きながらその費用をすこしずつ貯えているところである。

達子が死ぬ、と彼はふたたび思った。大学へいって彼女の弟の誠を探しださなければならぬ。しかし、彼は薄暗い部屋の底になおもぼんやりと立ちつくしたまま、いつものくせでまた右手をゆるゆると傷ついた自分の頭部へもっていつていた。彼の指先は草むらを這う蛇のようにひとりでに頭髮のあいだを縫い、頭部の皮膚の表面を滑って手術のあとの傷痕きずあとを探しあてていた。長さ五センチ、幅二センチほどの、毛の抜け落ちた、すべすべした傷のあとの皮膚の感触が指先にやわらかくのこる。この妙にすべすべした皮膚の下、プラスチック製の骨で手術のあとを補強した頭蓋のなかのどこかがちいさく狂ってしまい、ほとんど定期的にめまいや幻覚におそわれ、婚約者の黄色く盛りあがった肉の目が妖しげに彼の眼前に泛かびあがってくる。いそがなければならぬ、と彼は思った。なんといふことが起ころうとしているのだ。達子はあぶないという。彼はふたたび重いめまいにおそわれた。そうしてそこに、またしても崩折れるように蹲ってしまった。眼前が急激に昏くられてゆき、ふたたびあたり一面に青みがかった

黝い濃密な闇がおりてきた。いつものように闇はどこまでいっても尽きない深い永遠の闇のようであった。光もなく、時の流れもなく、ひそやかな人の声やかすかな物音すらない深い闇のなかで、彼は傷ついた夜のけもののように背をまるめて蹲り、じっと、瘦せた自分の両手で頭をつよくかかえこんでいた。闇のなかの彼の重たい頭蓋はかすかに揺れ、さらにその彼の重い頭蓋のなかで飛鳥井達子の潰れて黄色く盛りあがった肉の目が、なにやら人魂ひとたまのようにふわふわとさまよいあるいた。

やがて彼は両手でかかえこんでいた自分の重い頭をゆっくりともちあげ、粘りつくようなその周囲の闇を視た。閉ざされ、深くたちこめた濃密な闇のほかは、なにもものも存在せず、そこではあたかも闇が唯一の権力ででもあるかのようにだった。彼はなにかを視ているのであるが、所詮なにも眼に映らず、ただ自分の頭蓋のなかの黄色い肉の目を視ているにすぎなかった。喪われた自分の眼球を探し求めて、ふるえながら人魂ひとたまのようにふわふわとさまよいあるく達子の肉の目は、闇の大気のなかを浮遊する微小な水蒸気が白く凝結してできた水滴のつぶつぶをむきだしの肉の目の皮膚にくっつけて、あたかも白い泪をいっばいためて泣いているかのようだ。

飛鳥井達子の肉の目はなお白い大粒の泪を放ちながら、あくまでも行方不明になったおのれ

の眼球を探し求めてさまよい、そうしてそれがまったく彼の頭蓋のなかに現われなくなると、今度はその一面の深い闇のなかに一筋の黄金いろの炎の柱が天を焦がすように立ちのぼっていく。それはチャペルセンター前の路上で機動隊の輸送車が湿った六月の夜の冷気のなかで黄色い光を吹きあげて炎上していった炎の柱であった。そいつが彼の頭蓋のなかで燃えあがり立ちのぼっていく。そうして六月の夜の湿った風が闇のなかをかすかに渡ってゆき、暗く枝をふるわせて身震いする夜のユーカリ樹のひそやかな息づかいが感じられ、闇の天にむけて立ちのぼる幾筋もの黄金いろの炎は、彼の重たい頭蓋のなかで、手錠をかけられ両手と両足とを荒あらしくつかまれて闇のなかを頭から血を滴らせながら旧議員面会所の地下室へと運ばれていったかつての彼自身の傷ついた姿とともに彼の眼にさかしまに映った。……

第一章

街路に立ち、四月のやわらかいひかりにつつまれていながら、高坂一郎はなおも重苦しい頭をかかえていた。彼はさきほど城北区のはずれにある薄暗い木造の安アパートの部屋をでて、バスと私鉄とを利用し、さらに国電環状線に乗ってT駅で下車し、駅の改札口をでてきたが、しばらくのあいだ街路にぼんやりと立ちつくしていた。それから、彼はようやく、憶いだしたようにふらふらと大学への道をいそぎはじめた。

痩せた彼の身体は歩道のなかでひときわめだち、油気のないぼさぼさ髪は四月の街の底でかすかに揺れた。周囲には騒音が満ち、新しくできたさまざまなビルが街路の両側に建ちならび、ちょうど深く掘り下げられた一本の白蠟色石材の堀割のなかを騒音に押しながされながらある

いているような錯覚におちいる。学生時代にはあるきなれていた街路が、なぜかいまは、ある日とつぜん灰色の地殻に生じた深い亀裂のようなものにおもわれ、その亀裂の底をふわふわと押しながされていっているような気がする。街の様相も一変しており、彼はまったく見知らぬ土地に迷いこんでしまったかのような不安をおぼえた。やや前屈みになってその街の亀裂の底をあやうい足どりであるいていく彼の眼前で、歩道の敷石が前後にはげしくゆき来し、さらにその敷石の幾枚かがふいに消滅してしまって、そこにぽっかりと暗いうつろな穴がおおきく口をあけるような幻覚におそわれる。しかもその暗いうつろな穴は、なぜか蓋を取ったマンホールの穴のようにまるく、かつ深くみえて、もし腰を落とし頭を垂れて中を覗きこめば、そこにはうっすらとした薄闇が漂い、死んだような暗い湿った風がかすかに揺れうごいているようにおもえる。それはあきらかに彼自身の幻覚であるが、しかし彼の脳裡にはつぎの瞬間、真冬の深夜の街路に正方形にかなり幅ひろく綱を張り、木の柵をめぐらし、黄色い注意信号灯が幾つものつけておいてあった人^{ひと}気の無い工事^{ひら}中のマンホールの穴のなかへ頭から墜落していった一人の友人の不可解な行為^{ひら}がうかびあがってくる。

もちろんマンホールのなかへ頭から墜落していったその友人は、頭を碎き、首の骨を折って即死した。翌日の新聞は社会面の片隅に十数行ばかりのちいさな記事を載せて事故死として報

じたが、しかし彼はその記事を見て友人は事故死をしたのではなく自殺をしたことを疑わなかった。まず第一に、綱を張りめぐらし、木の柵をおき、しかも危険であることをしめす注意信号灯が幾つもつけてあった工事中のマンホールに過って落ちるということ自体がおかしかったし、さらに足の方から落ちるならまだしも、頭から落ちるなどということはとうてい考えられないことであった。それはあきらかに自殺としかおもえない不自然な死であった。高坂がその友人と初めて知りあい親しくなったのは、最初の手術をするために入院していたある大学の附属病院においてであったが、その附属病院をもつ大学の農学部を中退していたその友人もまた、高坂とおなじく十年まえに警棒で頭を強打された傷の後遺症に苦しんで入院中であった。世の中はすでにアメリカとの安全保障条約改定後の相対的安定期にはいっており、オリンピックを開催し終え、アジアで唯一の先進工業国としてこの国はさらに高度の経済成長を遂げつつあるときであった。なぜその友人が自殺の場所としてマンホールなどを選んだのか、それだけが高坂にとってながいあいだ解けぬ謎であった。工事中のマンホールなどへ、それでも警棒で頭を強打されて頭蓋骨にヒビを入らせていた男が頭から突っこんでいって自殺しなくても自殺する方法は他に幾つかあるはずである。まして頭から突っこんで頭蓋骨をさらに砕いてしまったその友人がひそかにポケットのなかに一匹の醜いモグラの死骸を忍ばせていたという事実

は、高坂のこころをひどく落ち着かないものにした。全身暗鼠灰色の、目はあくまでもちいさく、尾は短く、そのうえ耳殻のない、つねに暗い土中にもぐって暮らす頭胴の長さ約十五センチばかりの趨暗性の小動物であるモグラの死骸をポケットのなかに忍ばせて頭から工事中のマシンのなかに突っこんでいったその友人の死は、いままなお高坂のこころの奥深くに謎めいたおぞましいものとなっている。

いそがなければいけない、と高坂は胸のうちに呟きながら、装いを一変し自分のまったく見知らぬものと化してしまった街の底をふらふらとあるいていった。かつてなじみの深かった街路の両側の二階建の建物はすっかり姿を消し、幾つものビルが地殻の変動によってとつぜん隆起した死灰色の巨大な岩石のように建ちならび、たしか中華そば屋のあったところに真新しい銀行のビルがどっかと腰を据え、古くさいヤキトリ屋がスナックバーに変身している。新しいレストランが忽然と地上に降って湧いたようにその瀟洒な姿をあらわしており、新刊本の書店が新築ビルの一階の広いスペースをゆったりと使って開店している。その地下深くには、なにやらおおきなジャズ喫茶らしきものでもできているらしく、そこのおおきなほら穴の入口のような地下への階段口からは、耳になじまぬ狂瀾のひびきをもった音楽が湧きおこっている。いそがなければならぬ、と高坂はふたたびいらだたしげに呟きながら大学へつうじる地殻の割

れ目があるいていった。この街路でわずかにむかしの面影をとどめているのは、あといくばくの命脈も保てないとおもえる二十数軒の古本屋の存在だけであった。

いそがねば、と焦りながら、しかし彼はこのときなぜか学生時代になじみの深かった一軒の古本屋の店先にふと立ちどまっていた。彼は腰をかがめて薄暗い店のなかを窺い、目を凝らして奥を覗きこんだ。しかしそこにはかつて彼と親しかった頭の禿げた丸顔のおやじはいなくて、もやしのようにひよろひよろした色白の老人がひとりぼつねんと坐っていた。店には客の学生たちの姿はなく、といって他の一般の客の姿もなく、がらんとした薄闇の空洞がむなしく覗かれるばかりであった。彼は一瞬、古めかしい書籍の山を呑みくだしたそのうつろな店内の薄暗がりを前にしてぼんやりとし、そこに木偶でのように突っ立ったまま動けなくなってしまった。しかし彼はすぐに、学生たちはいまのんびりと本を読んでいられるような状況におかれていないことに思い至り、納得した。また、十年の歳月の流れを想い、時代も書店主もすでに変わってしまったことを理解した。

「いまどき、古本屋稼業はだめですな。新刊本のほうが回転もはやく、高坂さん、古本屋というのは、いまどきよほど好きでなくちゃやれませんか」

よくそう言っていた、ふとった禿頭のおやじのまるい柔和な顔を彼は懐かしく憶いがかべて

いた。祖父の時代からだと言っていた根っからの古本好きのあのおやじもついに店を人手に渡し、転業していったのだろうか。彼が卒業後も大学にのこって研究しようとしていた安藤昌益に関する資料の大半はその古本屋のおやじがたいへん苦勞をして集めてくれたものだった。その資料だけはいまもアパートの彼の四畳半の部屋のたった一つの本箱のなかに、なにやら秘密めいたもののように大切にしまいこまれ、売り払われることなく保存されている。いまではひろげて読むことすら彼には不可能な資料であるが、しかしその存在だけが、生きていくうえで彼のささやかな支えになっていた。

彼は昌益の著書『自然真営道』全百巻九十九冊のうちで現存するもの十五冊の写本と『統道真伝』全五巻の写本とを学生時代に集めていた。また、これまで二十数人の学者たちによって書かれた昌益に関する論説や研究論文の載っている戦前戦後の学術雑誌と、数少ない研究書のすべてを根気よく集めていた。東北の草深い八戸^{はちの}で、一介の貧しい町医者として昌益が非法法裡にひっそりと著述活動をつづけたのは、主として江戸中期の宝暦年間であったが、彼はなぜこの閉ざされた時代の孤独な自然哲学者であり社会思想家である安藤昌益にこころを惹かれたのだろうか。閉ざされた封建の世の中であって、孤絶しながらも、絶対的武士階級を、「衆人直耕の穀産を貪り、若し之れに抗む者あれば武士の大勢を以って之れを捕縛す。是れ自然の天

下を盗むなり」としてゆるぎない武家制度を否定し、武士階級のもとにあえぐ農民の生活を「上無く下無く、貴無く賤無く、富無く貧無く、唯自然常安なり」として当時きわめて独自の思想を展開したその思想的営為にこころを惹かれたからであろうか。儒教や仏教にたいしては、「儒書仏書共に自然の本体なる直耕の妙序を顯わすことなく、之れを埋めて、妄りに天地、日月、男女、君民、仏衆、上下、尊卑、善惡等、凡て二別の教門を立て、二にして一直気なる真道を盗み、天下を迷わす。自然の道を知りて之れを為すか。知らずして之れを為すか。若し知りて之れを為すとせば己を利せんが為に天道を盗むなり」「知りて盗む者は盜なり。聖釈之れなり。……上下共に妄盜する世と為せしは即ち聖釈の罪なり」と批判し、孔子、釈尊をはじめ多くの聖人君子たち、さらに儒学者や僧侶たちを不耕貪食の徒として否定した。また非戰論者でもあった昌益は、「吾が道は兵を語らず」といい、軍隊と武器の廢絶を説き、「自然直耕の道には治乱なきことを明らむこと之れあり。速やかに軍学を止絶して、悉く刀劍、鉄砲、弓矢、凡て軍術の用具を亡滅せば、軍兵大将の行列なく、止むことを得ずして自然の世に歸るべし」として、封建の世の中にある反封建的先進思想をこの日本で初めて確立しようとしたきわめて独創的な思想家安藤昌益に、とにかく彼は引きずりこまれるようにこころを奪われていた。そうして彼は安藤昌益を読みこみ、ノートも十数冊つくり、卒業論文のテーマも昌益を